

	一般的名称	報告の概要
242	ブスルファン	白血病患者271例の同種造血幹細胞移植において静注ブスルファンの前処置に関して試験を行ったところ、肝静脈閉塞性疾患(VOD)は10.4%に発症した。VODは同胞ドナーと比較して、非血縁ドナーにおいて発症率が高く、骨髄非破壊的レジメンよりも破壊的レジメンで高かった。
243	ブスルファン	過去に同種造血幹細胞移植を施行した患者をブスルファン(Bu)+シクロホスファミド(Cy)1日1回投与群、Bu+Cy1日4回投与群、全身放射線療法+Cy群に分類し、レトロスペクティブに解析したところ、肝静脈閉塞症が、1日1回投与群で2例、1日4回投与群で1例みられた。また、グレード2-4の急性GVHDが1日1回投与群で33%、1日4回投与群で53%、放射線療法群で32%発症した。
244	ブスルファン	重症型サラセミア25例に対して、ブスルファン(Bu)とシクロホスファミド(Cy)に加え、フルダラビン(Flu)による骨髄移植療法の前処置を施行したところ、評価可能な20例中、グレード1-2の急性GVHDが3例、出血性膀胱炎と肝静脈閉塞疾患が各2例みられた。また、びまん性肺出血、頭蓋内出血、敗血症による死亡例が各1例みられた。
245	ゲムツズマブオゾガマイシン(遺伝子組換え)	急性骨髄性白血病患者にゲムツズマブオゾガマイシンを投与したところ、溶血によるものと考えられる重度の炎症及び多臓器不全が3例みられた。
246	塩酸イリノテカン	結腸癌患者を対象とした大規模集団(3005例)において、フルオロウラシル/ロイコボリン/イリノテカン(FOLFIRI)投与によるグレード4の好中球減少発現リスクを検討したところ、UGT1A1*28/*28を持つ患者や女性患者で有意に増加した。
247	テガフル・ウラシル	進行胃癌患者50例に対して、3剤(IL-2、IFN- α 、テガフル・ウラシル)併用免疫化学療法を行ったところ、グレード4の白血球減少が1例、グレード3の悪心・嘔吐、下痢、中枢神経症状/失見当識、粘膜炎、ヘモグロビン血症が7例にみられた。
248	エポエチン β (遺伝子組換え)	エポエチン β を用いて実施した12試験(無作為化試験)2301例の症例ベースのメタアナリシス解析を実施し、全生存期間、癌増殖、血栓塞栓症に対する影響を検討した試験において、本剤投与群はコントロール群と比較して血栓塞栓症発現頻度が増加した。
249	硫酸サルブタモール	サルブタモールを含む β 刺激薬の吸入製剤と虫歯との関連について、 β 刺激薬の吸入製剤を使用した患者で虫歯の発生が高くなり、虫歯との関連性が示されている。
250	水酸化アルミニウムゲル・水酸化マグネシウム	ロスバスタチンと制酸剤との併用について調査した結果、ロスバスタチン単独投与の場合に比べて、同時に服用した場合にはAUCが54%、Cmaxが50%減少した。また、ロスバスタチン服用後2時間後に制酸剤を服用した場合にはAUCは22%、Cmaxは16%減少した。
251	インターフェロン ベータ-1a(遺伝子組換え)	標準的高用量インターフェロンベータ-1a皮下投与中の臨床的に安定している再発寛解型多発性硬化症患者をプラセボ群9例、アトルバスタチン40 mg/日群7例、80 mg/日群10例の3群に無作為割り付けして行われた二重盲検法による比較により、アトルバスタチン併用による原病悪化の可能性が示唆された。
252	レボホリナートカルシウム	残存、再発、転移性の頭頸部および食道の扁平上皮癌患者15例を対象とした、シスプラチン/フルオロウラシル/ホリナートカルシウム併用療法のphase II試験において、好中球減少性発熱で1例死亡した。
253	塩酸ロペラミド	妊娠初期の母胎へのロペラミド投与による先天奇形の発現リスクについて調査した結果、ロペラミド使用群では先天奇形のリスクが高まった。
254	非ピリン系感胃剤(4)	妊婦のカフェイン摂取と流産のリスクについて調査した結果、カフェイン摂取量の増加に伴い流産リスクは上昇し、特にカフェイン摂取量が多い(200mg/日以上)群では流産のリスクが高かった。
255	ワルファリンカリウム	ワルファリン投与患者171例を対象に、ユビキノンはショウガ使用によるINRの治療域以上への上昇と出血リスク上昇を検討した試験において、ユビキノンはショウガによりワルファリンの出血リスク上昇が示された。

	一般的名称	報告の概要
256	塩酸ベラパミル	ベラパミルはP糖タンパク(P-gp)、CYP3A4の基質であり、ベラパミル、アトルバスタチンはP-gp、CYP3A4を阻害することから、アトルバスタチンの併用によるベラパミルの薬物動態への影響について調査した結果、アトルバスタチン併用でベラパミルのAUCは有意に上昇した。
257	ミダゾラム	イチョウ葉エキス(GBE)は動物実験やin vitroでCYP3A4、P-gp活性に影響を及ぼすことが示されている。ロピナビル、リトナビル、フェキシフェナジンにおいては、GBE併用による影響は現れなかったが、ミダゾラムはGBE併用でAUC、Cmaxが減少した。
258	セフトリアキソンナトリウム	ライム病患者37例をプラセボ群14例、セフトリアキソン投与群23例に無作為割り付けして行われた二重盲検法による有効性試験において、セフトリアキソン投与群の2例に血栓症が報告された。
259	マレイン酸チモロール	原発性開放隅角緑内障(POAG)と原発性後発性鼻涙管狭窄(PANDO)との関連性について調査した結果、PANDO群でのPOAG有病率はコントロール群に比べて有意に高かった。PANDO群においてチモロール点眼による緑内障治療患者がコントロール群に比べて多かった。
260	エストラジオール	ホルモン補充療法による血中脂質と高感度C反応性タンパク(hs-CRP)の変化と冠血管疾患のリスクについて調査した結果、ホルモン補充療法群において、LDL/HDLが2.5以上の患者で冠血管疾患のリスクが高かった。
261	エストラジオール	ホルモン療法(HT)の乳癌発現リスクと閉経からHT開始までの期間について解析した結果、閉経後5年以内にHTを開始した群は、5年以上経過してから開始した群に比べて乳癌発現リスクが有意に高く、使用期間が長くなるにつれて乳癌発現リスクは高まった。
262	カルバマゼピン	FDAが抗てんかん薬の使用による自殺関連事象のリスクについて、11薬剤でメタアナリシスを行った結果、自殺関連事象はプラセボ群に比べて薬物投与群で有意に高かった。また、抗てんかん薬群は抗精神病薬とその他の適応の群に比べてリスクが高かった。
263	バルプロ酸ナトリウム	胎児期のバルプロ酸暴露によって尿道下裂のリスクは非暴露群の5.71倍となった。1st trimesterにバルプロ酸を使用していた母親から生まれた児の尿道下裂発現率は1.8/1000出生であった。
264	アセトアミノフェン	65歳以上の高齢者におけるアセトアミノフェン、NSAIDsの使用とPPIの使用による消化管疾患について、PPIの有無にかかわらず、NSAIDs又はアセトアミノフェンの使用によって上部及び下部消化管障害の発生リスクが高まった。
265	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	切除不能肝細胞癌の24例に対して、シスプラチンとヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステルの懸濁液を用いて肝動脈塞栓化学療法を行った結果、grade3/4以上の副作用は血小板数減少が13%、食欲低下が8%、悪心が4%あり、肝不全、腎不全、死亡はなかった。
266	コハク酸メチルプレドニゾンナトリウム	急性脊髄損傷へのステロイド大量療法による早期合併症の発現について、ステロイド投与群においては、投与開始から6週以内の早期合併症発現率が非投与群に比べて高かった。また、70歳以上の高齢者で合併症発現率は高頻度となり、投与群の合併症としては特に深部静脈血栓症の発現が多かった。
267	リファンピシン	リファンピシンを投与した健康成人において、リファンピシンを投与しない場合と比べグリベンクラミドのAUC増加、血中グルコース濃度低下が観察された。
268	塩酸ラニチジン	プロテアーゼ阻害薬(ロピナビル、アタザナビル、リトナビル)の薬物動態に胃酸抑制薬(オメプラゾール、ラニチジン)の併用が及ぼす影響について調査した結果、オメプラゾール、ラニチジンとの併用でアタザナビルのCmax、AUCは減少したが、ロピナビルのBAには影響を及ぼさなかった。
269	エストラジオール	ホルモン補充療法による血中脂質と高感度C反応性タンパク(hs-CRP)の変化と冠血管疾患のリスクについて調査した結果、ホルモン補充療法群において、LDL/HDLが2.5以上の患者で冠血管疾患のリスクが高かった。